

一人一人の力を引き出す題材と支援のあり方 ～『鑑賞』領域に視点を置いて～

I 主題設定の理由

じっくりと物事を見つめ、試行錯誤を繰り返しながら、自由に、またおもいのままに自分を表現することができる図工・美術は、大切に必要とされる教育であると私たちは考えている。

しなやかな心や豊かな心情を育て、のびのびした表現活動を展開していくための題材と支援に焦点をあて研究を進めてきたが、図工・美術教育の中の「鑑賞」の領域の捉え方や授業の持ち方が話題になり、実践例も紹介された。そこで、今年度は「鑑賞」に視点を置き、鑑賞の授業のあり方・捉え方・考え方あるいはその授業の進め方・鑑賞と表現のかかわりといった研究をしていくことにした。

「鑑賞」領域についての指導のあり方を研究協議し、あるいは実際に授業を参観しあう中で、子どもたちの力を引き出す題材と支援はいかにあるべきかのテーマに迫って生きたい。

II 研究の内容

1 研究の進め方

授業の共同提案・検討・実践・検証

「鑑賞」領域に重点を置き共同で実践研究する。

- ・授業研究（小）を実施し、授業のあり方を考える。
- ・実技研修を実施し、授業へ還元する。
- ・研究会場を持ち回り、各校の展示環境や鑑賞学習を参考にする。

2 実践研究

(1) 小学校の実践から

・「・から どんどん！ぐんぐん!!」

三枝清美（松里小1年）

〈11月統一授業研の実践〉

「・」から並べていく。どんどん並べていく。並べるのが楽しくて仕方がない子どもたちの動きがあった。体育館に子どもたちがそれぞれ思い思いにひろがっていった。遊びを中心とした題材の与え方・支援（ことばかけ、児童の予想への対応）の工夫が観られ大いに参考になった。観点を的確にした4枚のカードを使い授業の目的を子どもたちにきちんと知らせていた。教師の授業のねらいと学校全体の取り組みの成果が生きていた。また児童の作品が

飾られた校舎は小美術館のようで日頃の指導が生きていた。「ぴぴっとタイム」「リレー粘土」の実践は4枚のカードの利用とともに参観者を刺激したものだ。

(2) 中学校の実践から

・「わたしのこだわり！紹介します。」 雨宮智美（山梨北中1年）
〈県教研提案実践〉

表現と鑑賞の領域の授業をつながりのあるものにしたい。鑑賞の授業をもっと日常のものにし、楽しく取り組めるようにしたい。鑑賞から表現へ、そして、表現しながら鑑賞を、として、授業者は両者の境目のない授業を意識して設定した実践。具体的な声かけの言葉や「スタンドアップの会」「ミニミニ発表会」などの日頃の鑑賞授業の取り組み、教室の配置などの支援を学ぶことができた。また展示環境も大いに参考になった。

Ⅲ 成果と課題

研究テーマ「一人一人の力を引き出す題材と支援のあり方」に基づき、特に本年度は「鑑賞」領域について共同研究をしてきた。授業案の検討や実践報告をする中で、話し合いを重ね、その捉え方や問題点等について研究を深めることができた。

日頃から「みること」を楽しむ子どもを育て、やがて生活の中で、何気なく美術を取り入れる大人になってほしいという共通の願いを持ちながら部員から実践の報告がされたこと、昨年から引き続き「鑑賞」の研究ができたことは良かったと思う。

また、授業づくりだけでなく、学校全体の環境を美的視点から整えていく方向に広げていく重要性や美術教育の根本的な意味を考える良い機会になった。

会場校を持ち回り、各校の展示環境や、鑑賞教育の状況を見合う試みは、日常的な鑑賞活動など、互いの「鑑賞」に関する取り組みで大いに刺激となり役立つものになった。少ない部員ではあるが、小中連携をとりながら、今後もそれぞれの実践を互いに生かして研究を深めていきたいと考えている。

（部長 大村真智子）